

暗黒告知

小林久三

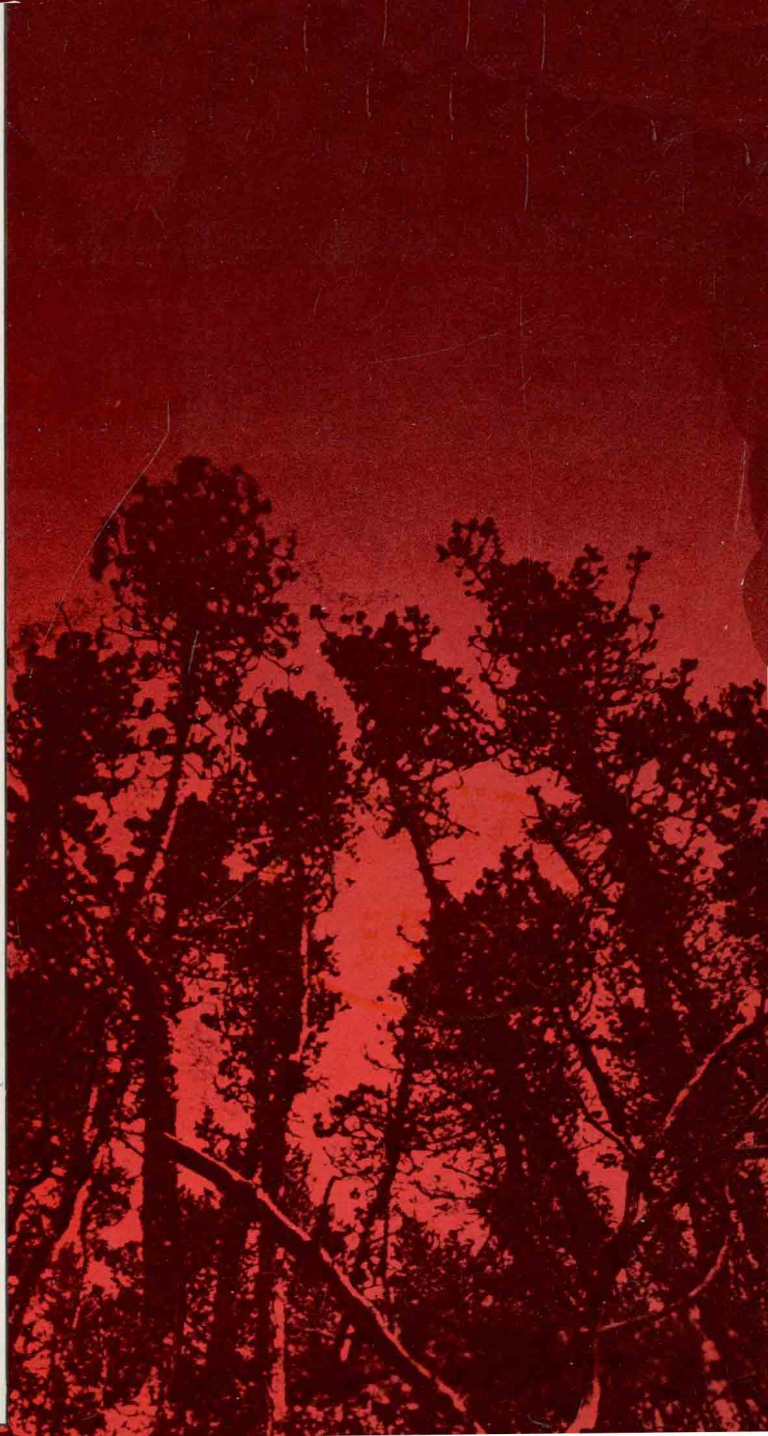


暗黒告知

第二〇回江戸川乱歩賞受賞作

小林久三

講談社



著者略歴

本名、小林久三、昭和10年11月茨城県古河市に生まれる。東北大学文学部卒業後、松竹大船撮影所助監督を経て、現在、松竹映画プロデューサー。「腐蝕色彩」で第三回「小説サンデー毎日」推理新人賞受賞。映画、テレビ・ドラマ等多数執筆。現住所、神奈川県川崎市三田四丁目 西三田団地四―九―五〇―

暗黒告知

著者 小林久三

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二
〒一一二 振替 東京 三九三〇
電話東京(〇三)九四五―一一二(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

第一刷発行 昭和四十九年九月十二日

©小林久三 昭和四十九年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

目次

第一章	死の川の怨嗟——明治四十年四月一日	5
第二章	獅子の推理——明治四十年四月二日	38
第三章	『川俣橋事件』の謎——明治四十年四月十五日	83
第四章	闇の沼に消えた——明治四十年四月二十五日	124
第五章	死の連環——明治四十年四月二十六日	153
第六章	手型の意匠 デザイン	187
第七章	闇の呼ぶ声——明治四十年四月二十七日	220
第八章	白骨の荒野——明治四十年六月二十九日—七月十五日	246
第九章	暗黒告知——明治四十一年六月二十九日	262
第十章	獅子は荒野に眠る——大正十年十二月三日	302
	選考経過報告	322

暗 黑 告 知

装
幀
辰
巳
四
郎

第一章 死の川の怨嗟 — 明治四十年四月一日

1

「川筋往來の船頭が水をのむと唇の色が変る。貧民が川の芥あぐたを拾ってマキにたくと手足や顔が荒れる。……まずこの毒は平日は川の底に沈んでいる。これが一朝洪水になると、水勢で泥をふきあげて、毒水になって流れてくる。……この泥が一寸でも五分でも何ほどでもおかれたところは作物ができない」

明治二十四年五月二十四日 田中正造、足尾銅山鉍毒事件、衆議院演說速記録より

川を渡ってくる風は斬りつけるように冷たかった。もはや皮膚に感覚は失われていた。真ッ向から斬りつけてくる風を、ただ壁のように受けとめているだけだった。かわりに、鋭い痛みが全身に沁み渡った。

夕暮れが迫っている。堤から眺める村落は白一色で重い。雪はやんだ。風が出てきた。暗灰色の雲が低くたれこめている。そして、村を圍繞いよちうする三本の川の鉛色の流れ。色彩感を欠いたその遠景は、荒涼

とし、異様な空白感を感じさせる眺めだった。モノクロームの、墨絵^{すみえ}ばかしの世界。

へこの村も、まもなく水の底にしずむ

堤の内外千二百余町歩の谷中村は、やがて広大な瀬水池^{せすい}にかわるだろう。明治十年代から三十年間にわたり、世間をゆるがせつづけてきた足尾銅山鉍毒事件もおおづめにちかい。

へこれが農民たちが奪われんとしている土地だ

堤に立ち、村を眺め渡しながら、北関東タイムス記者の藤田省三は、胸のなかでそう呟いた。とたんに重苦しいものが胸をふさぎ、苦い胃液がのどとにこみあげてきた。唇をゆがめてその苦さに耐えながら、鉍毒事件は結果的に農民側の敗北で終るだろう、と予感した。

今年の一月、西園寺内閣が谷中村に「土地収用法」を適用してから、村民の動揺は一段とはげしくなった。収用賛成派、条件つき賛成派、反対派の対立がひましにつよまり、村内には鋭い緊張感が漂っている。村の要所^{ようしよ}所^{しよ}には、巡査が配置され、村民の動きを監視している。

収用賛成派や条件つき賛成派のほとんどは、家と土地をすて、北海道や那須の開拓地に移住していた。のこった反対派の残留農民は、毎日のように藤岡町役場によびだされ、土地を売れと脅迫されている。葉売りや反物の行商人にばけた県の土木吏が、残留農民の家を一軒一軒たずね、説得しまわっている。かって四百五十戸二千七百人余をかぞえた村民は、つぎつぎに脱落し、いまはわずかに十九戸百余人が残留しているにすぎなくなった。

へこの収用反対の残留民の結末も

堤をおり、高沙八幡^{たかさ}の森を右手にみて、村道を^{おおしんぼり}大新堀にむかって歩きながら、藤田は胸のなかで自問自答をつづけた。へ勝野銀之助が、県や警察の手に落ちれば、いっきに崩れ去るだろう

銀之助は残留組の中心なのだ。結束のシンボルの存在である田中正造の、文字どおり片腕である。正

造がいかに強硬に鉍毒排出の足尾銅山の非をならし、鉍毒事件の最終的帰結であるこの村の瀦水池化案に反対しても、背後に村民の強固な結束がなければ、その声は、荒野にあげる老獅子の孤独な咆哮にすぎない。

へそれにしても、正造はなぜ鉍毒事件に身心ともになげうつのか。その情熱はどこからうまれてくるのだろうか。

藤田の頭の奥に、正造のイメージが滑りこんできた。のび放題の髪を無造作にわらでむすんだ慈姑頭。太い皺をきざんだ広い額。眠っているようで、時折り、ギラッと研ぎすまされた鎌の刃先きのように光る眼。頑健そのものといった体つき。改進黨代議士として六回連続当選を果し、衆議院議長を尊されながら、惜しげもなく代議士の地位をすてて、三年前にこの村に身を投じた六十七歳の老人だった。一貫して、鉍毒事件の非を弾劾しつつ、この村の瀦水池化案に反対しつつづけている。無私の情熱というべきであった。

だが、この老人もしょせんは他所者にすぎない。去年の暮れ、残留農民のリーダー格だった川鍋岩五郎が脱落し、姿をくらましてからの残留農民の動揺をみるがいい。正造の歯ぎしりをよそに、残留農民たちはつぎつぎに買取におうじ、離村していったではないか。

川鍋岩五郎は、県側に寝返った報償として、息子が県の土木雇いに採用されたという風説がある。川鍋自身、深夜ひそかに村に姿を現し、残留農民を説得しまわっているといわれる。さらに、残留農民の某に大枚数百円の金が、こともあろうに警察から手渡されたという奇怪な噂もながれている。

へ奇怪なこの噂には、ある種の信憑性がある。

藤田はそうにらんでいる。大枚の金をつかまされたのは、おそらく勝野銀之助だろう。新聞記者としてのカンが、そう教える。勝野にあい、その情報の正確度をたしかめれば、

「谷中村崩壊す」

と、記事にするつもりだった。

谷中村に隣接する古河町で発行される旬刊のちっぽけな地方新聞にすぎないけれども、谷中村事件の論評と報道にかんしては、東京発行の万朝報や東京朝日、毎日、国民新聞にはけっして負けない。そんな気概と気負いが、二十七歳の彼の胸には泡だっているのだ。

この情報をつたえたのは、同じ古河町で茶間屋をいとなむ「大半」の若主人の岸本吟一だった。

藤田と岸本は、町の小学校、盈科中学を通じて同級生だったが、その後、岸本は東京のM学院にはいり、遊学をおえて三年前に帰郷すると、文学に熱中した。北村透谷に傾倒し、藤田と谷中村の堤を歩いては、

「われは歩しては水際に下れり。浪白く万古の響を伝へ、水蒼々として永遠の色を宿せり」

と、透谷の文章を朗誦してきかせた。幼時にわずらった小児麻痺で右足を軽くひきずり、額にかかる長髪をかきあげ、風にひかる草の白い穂波を眺めながら、透谷の詩や文章を吟じたあと、きまつて彼は、

「ああ、もう一度東京に出て、小説を書きたい。こんな田舎町でうもれてたまるかと、身悶えするようにいうのだった。」

藤田には、岸本の胸の奥に巣くっている鬱屈感が手にとるように理解できた。文学へのたぎるような熱情をもちながら、二年前、日露戦争が終った年の夏に父が病死し、長男として家業の茶間屋をつがねばならなかった彼の、胸に吹きあれている不安や焦燥感は充分推察できる。

同じ焦りや不安が、自分の胸にもあるのだと、藤田は思う。病弱の母をかかえ、東京の大新聞で思う

ぞんぶん筆をふるいたいというのぞみをねじまげられたまま、ちっぽけな町の新聞を発行しているおのれの心に鬱積している焦りや不安は、岸本のそれと同じものだ。

岸本は、ときどき、「北関東タイムス」に詩や文章をよせた。青春の悲傷や恋ころをうたった詩が、とくにすぐれていた。酒をのみ、暗く底光りした眼を炯炯とひからせ、肩をふるわせながら、岸本は、透谷亡きあとの東京の文壇を口をきわめて罵倒した。そんな彼をみていると、藤田は、なぜか秋の刈萱を吹き倒しながら渡っていく白く光りぬける野分けを連想した。詩人肌の岸本には、どこか人をおびえさせるような凛冽な魂があるようだった。

その岸本が、足尾銅山鉍毒事件に興味をもつようになった。憑かれたように鉍毒事件の文献をあさり、むさぼるように新聞を読み、不自由な足をひきずって谷中村を歩き、熱心に正造の演説をきいてまわるようになった。官憲の迫害をうけ、まずしさにあえぐ残留農民とじかに接触するにつれ、残留農民の庇護にいのちを賭ける正造の熱誠に共鳴し、資金面の援助をするまでになった。一年前の三十九年春のころからのことである。

藤田は、この友人の鉍毒事件被害農民への肩入れを、一種熱病のようなのだとひややかに眺めていた。田舎町で家業をつがねばならなかった不満感や自閉意識が、反射的に谷中村残留農民への同情となつてほとばしつたにすぎない。熱しやすくさめやすいのが、彼の特徴でもある。

藤田は十七歳のときから鉍毒事件に興味をもち、父が創刊した新聞をうけついだのも、事件への関心からだ。この問題の根はふかく、たんなる正義感や農民への同情からだけでは根本的な解決にはならない、と考えている。

だが、情報源としての岸本は貴重な存在だった。孤立して頑なになった残留農民の心は、他所者には口をカイのようにとざすが、理解者には気をゆるすようだった。

「残留農民の動搖がばげしい」

銀之助が県や警察に寝返ったらしい、と岸本が沈痛な面もちで語ったのは、おとといの三月三十日の夜のことである。その夜、石町の坂道の底にある「北関東タイムス」の粗末なしもたやをたずねてきた彼は、酒をくみかわしたあと、その情報をもらしたのだった。

「まさか」

編集室にあてている玄関わきの四畳半の部屋で、藤田は一笑に付した。

「いや事実らしい。きょうの昼すぎ、村で染野勇助にあったら、そういつていた」

「染野っていうと、出もどり組だな」

そうだと、岸本は暗い顔でうなずいた。

へこの情報^{ホウゴ}は信じてよさそうだ」

藤田はそう直感した。

出もどり組というのは、いちど県の買収におうじて県が用意した開拓地に入植し、生活に困りはててふたたび村へ帰ってきた村民のことをさす。帰村したもの、家はすでに県側の手によって取り壊されている。彼らは、屋敷跡に穴をほり、穴室^{あなむろ}生活をよぎなくされている。県側と残留農民の両方から白い目をむけられた彼らの一部は、警察に残留農民のうごきをつたえる「岡っ引き」の役割りをしいられているという噂も、藤田の耳にとどいていた。染野勇助は、たしか去年の夏、栃木県塩谷郡^{しほぐさ}箒根村から逃げかえった男のはずである。ネズミのように臆病そうだが、油断のならぬ眼をしたこずるような印象がのこっている。

「銀之助が裏切ったのならゆるせんな」

と、岸本がいった。藤田は黙ってうなずいた。まだ半信半疑だった。その思いが言葉になった。

「どこか信じられん」

「うむ」

岸本はうなずいて、

「しらべてみてくれんか」

「おれが？」

「ああ。寝返ったのが事実なら、正造先生に話して事前に手を打たねばならん」

「しかし、銀之助は新聞記者のおれに本音を吐くだらうか」

「おれだったら、よけい警戒するだらう」

「それより銀之助はおれにあらうだらうか」

「さけるかもしれんな」

岸本は視線を落し、手にした盃の底をぐるぐる回してしばらく考えていたが、やがて、

「明後日まで待ってくれ。君が銀之助にあえるようとりはかるう。あつたら、瀧水池化案反対運動の見通しをききながら、それとなく観察してくれ。うしろめたいところがあれば、言葉や動作のふしぶしに、どこか落着かないところが現われるものだ」

と、いい、藤田をみた。その眼にチカチカと狐火のように暗く揺曳するものがあつた。どうやら彼は、おれに密偵行動をうながしているようだ。それでもいい、と藤田は考えた。谷中村の残留農民に一方的に犠牲をしいる政府の方針には、義憤を感じている。残留農民の先頭に立っている銀之助が、彼らを裏切れば村はいっきよに強制破壊されるだらう。その動きをみつめ、記録にとどめておくのが社会の木鐸としての新聞記者のつとめではないか。

「わかった。君に協力しよう」

と、藤田は共犯者めいた微笑を唇の端にうかべていった。「銀之助にあわせてくれ」

岸本は刺すように彼をみつめ、それから乾いた声で、

「明日か明後日に連絡する」

と、いい、今夜これから木下尚江を駅まで迎えにいくのだとつけ加えると、立ち上った。

玄関先まで送りながら藤田は、この友人の眼にはなにか危険な火が燃えているな、と思った。木下尚江は、社会主義者である。元毎日新聞の記者で、足尾銅山や渡良瀬川を視察しているうちに田中正造に賛同し、東京で石川三四郎や荒畑勝三、福田英子らと鉱毒事件弾劾の激越な論陣をはっている。谷中村にもときどき姿をみせ、藤田もその顔を知っている。いつも中折れ帽をかぶり、鋭い眼つきの持主だが、なにか思想的な悩みをいだき、群馬県の伊香保温泉の温泉宿に寄宿しているらしい。その彼が、谷中村の事態が急迫したことを知って半年ぶりに山をおり、古河にくるといふ。その噂は、藤田も耳にしている。

へ東京雄飛の夢を断ち切られ、胸のなかにくすぶりつづけている無念さが、岸本をさらに急進的にしていくのだろう」

暗い坂道を左右にゆれながら昇っていく友人の淡い影を見送りながら、藤田は胸に不吉な予感をおぼえた。だが、安心していい、と自分にいいかせた。やつには、おれがもっていない純粹でひたむきな魂がある。うまれたままの生地^{きじ}のよさ、といったもので、おれのように屈折感で暗くねじれた臭味をまゐるで身につけていない。

きのうの三十一日は連絡がなかった。

暦が新たにめくられたけさは朝から雪になった。雪のなかを岸本はたずねてきて、

「きょうの夕方四時に、内野^{うちの}の江原宗吉の本塚^{ほんづか}にいつてくれ。そこで銀之助が君を待ってるはずだ。銀

之助は、強制収用反対の請願書を、地方長官に出す文書をみせてくれることになっている」

と、いい、これから藤岡町で近在の茶業者の寄りあいがある、夜には帰るから結果をしらせてくれ、とつけ加えると、そそくさと帰っていった。それが昼の十時前だった。

雪は、藤田が家を出る午後三時半ごろまで降りつづいた。積雪十センチをこえる季節はずれの大雪になったが、町のはずれにかかった三国橋を渡り、村にはいる築堤についたころには、雪は完全にやんでいた。

高沙の部落をつきぬけ、内野の部落にはいる。その二筋道にきたときだった。

火の見やぐらの下に、黒の外套をきた巡査が二、三人、巡邏している姿が藤田の眼にとびこんできた。腰にはサーベルがつるさされている。帽子のひもは顎にしっかりとかけられていた。それ以外に人影はない。家々は、死に絶えた村のように静かだった。おそらく、村の要所には、巡査が立って、不審者の出入りに警戒の眼を光らせているのだろう。ものものしい張番の巡査たちの姿が、いよいよ強制収用の日が近づきつつあるという緊迫感をおぼえさせた。

若い巡査がめざとく藤田の姿に気づくと、走りよって大声で誰何した。

たちまち巡査が藤田をとりかこんだ。

顔見知りの巡査ばかりだった。暗くくぼんだ眼をした初老の関巡査部長は、

「なんだ、羽織ゴロか」

と鼻を鳴らし、どこへいく、と横柄な口調でたずねた。藤田は一瞬ムッとしたが、すぐに冷静さをとりもどすと、

「役場に加藤さんをたずねるところです」
と、とっさにでまかせをいった。

加藤というのは、栃木県庁からこの村に派遣されている買収委員である。県庁の深町内務部長の懐刀として、残留民切り崩し工作の尖兵役をつとめ、残留農民からは蛇蝎のごとく知らわれている男だった。

加藤の名前をきいて、巡查たちは安心したようだった。同時に、彼らが藤田とは顔なじみであり、彼がけっして「不穏な人物」でないことをあらかじめ承知していたからであろう。巡查部長の関は、「よし、いけ。村をうろついたらいいかんぞ」

と、命令すると、部下とともに火の見やぐらのほうに引きあげていった。その後姿をみつめながら、藤田はべっと唾を雪のうえに吐いた。

「羽織ゴロとはなんだ！」

羽織ゴロとは、明治三十年代の新聞記者の蔑称だった。和服を着、新聞の権威を背景にして横柄な態度をしめす品格のない手合いが多かったことは事実だが、その蔑称は若い彼にとつてはゆるしがたい屈辱だったのだ。地方紙とはいえ、自分ひとりできりまわしている「北関東タイムス」は、世人を覚醒させ、正論を吐くための新聞だという自負がある。

新聞記者が羽織ゴロなら、巡查は制服ゴロではないか。三、四年前、三宅雪嶺が、「日本人」に書いていたように、土族や足軽から出た者が多い巡查は、威権をもてあそぶことが多い。官庁がしだいに旧格を改めて、万事丁寧になっていくのに、ひとり巡查が威張りちらしているのは感心しない。

この辺の巡查も旧土族出身者が多く、農民に必要以上に荒あらしくあたるため、鉅毒事件がよけいにかじれる原因にもなっている。

不快な気分、いつまで陥ちこんでいる余裕はなかった。

藤田は頭を振ると、村道をまっすぐ歩きはじめた。歩きながら、懐から懐中時計をとり出して、時間